

主語倒置について
—スペイン語とルーマニア語における長距離 Wh 移動の場合—
La inversión del sujeto

—en el caso del movimiento largo de Qu en español y rumano—*)

石岡 精三
Seizo ISHIOKA

0. はじめに

(1a) で観察されるように、一定の Wh 要素、例えば項である Wh 要素が移動する派生における主語倒置は、その移動先の CP (Root CP) において義務的に適用される。(1b) の C₂P 内部のような Non-Root の環境にあって最も深く埋め込まれた節では、この主語倒置の適用は随意的となる。しかしながら、Root CP と最も深く埋め込まれた節との間にある CP 内部の環境においては、主語倒置の適用が随意的である話者グループ (1c) と、その適用が義務的である話者グループ (1d) の存在が確認される (定動詞の直接左方に生起する倒置が適用されない要素に二重下線を付す)。

(1) a. ¿Qué (*Juan) compró (Juan) ayer?

‘What did Juan buy yesterday.’

b. ¿[C₁P Qué] (*Juan) dice (Juan) [C₂P que (María) compró (María) t_i]? (Zubizarreta 2001: fn.12)

‘What does Juan say that María bought?’

c. ¿Qué dice Juan [C₁P que (María) ha dicho (María) [C₂P que Ana ha comprado t_i]]?

‘What does Juan say that María said that Ana bought?’ (Uribe-Etxebarria 1992: (26))

d. ¿Qué pensaba Juan [C₁P que (*Pedro) le había dicho (Pedro) [C₂P que la revista había publicado t_i]]?

‘What did Juan think that Pedro had told him that the journal had published?’ (Torrego 1984: (19c))

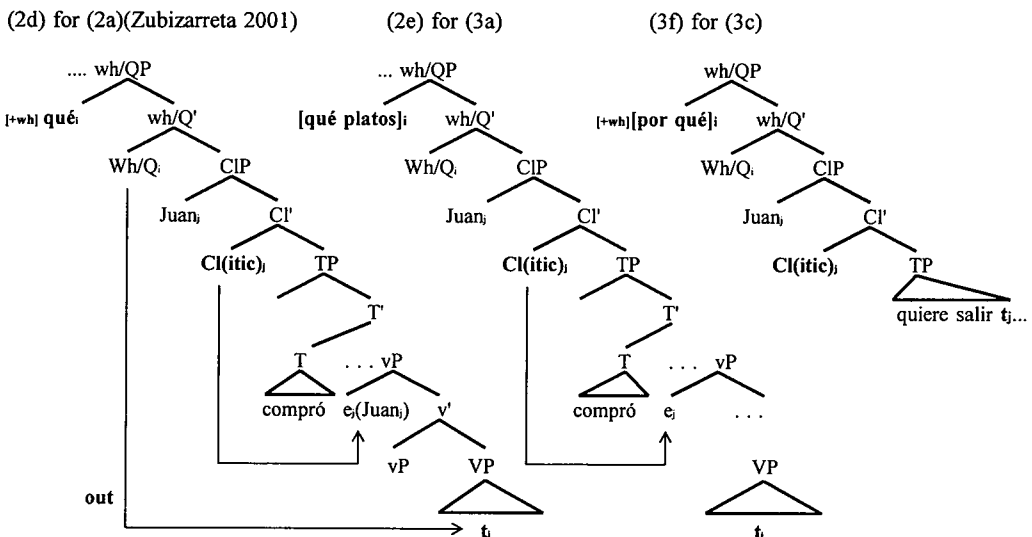
(1a) の倒置を説明する Zubizarreta (2001) に立脚する本稿では、この両話者グループの相違を説明する論法を提示する。具体的には、演算子 (operator) に対応する変項 (variable) の同定プロセスを想定する。本稿は、以下のように構成される。第1節では、Zubizarreta (2001) の概略を提示し、この論法では (1c) と (1d) の相違の説明が不可能であることを示す。第2節においては、変項を特定するプロセスを想定することにより、(1c) と (1d) の説明を試みる。併せて、本稿の論法が基本的にルーマニア語の並行事象にも適用可能であることを示す。結びを構成する第3節では、本稿の仮説群、そして Zubizarreta (2001) に対して問題を引き起こすと思われる用例の検討とそれに対する打開策を提示する。

1. 主語倒置と Zubizarreta (2001)

ここで、(2a) の非文性について考える。その派生構造 (2d) で示されるように、Zubizarreta (2001) は、項要素 (主語と目的語) がその Spec 位置に基底生成され統語的演算子 (syntactic operator) として機能する Cl(itic) の投射と、Wh 要素がその Spec 位置へ移動する Wh/Q の投射を想定する。スペイン語では、Q 素性と Wh 素性が Wh/Q に融合していると想定される。Spec-Head Agreement により、

その Spec 位置に生成される主語要素 (*Juan*) と同一の指標をもつ CI が Spec(v) にある変項 (variable) を束縛する。D-Linked Wh 要素でない通常の Wh 要素は、DP (Determiner Phrase) あるいは PP (前置詞+DP) を構成し、Spec(D) にある素性 [+wh] が DP まで上昇浸透する。Wh 要素が PP の場合には、素性 [+wh] が更に PP まで上昇浸透する。素性 [+wh] が上昇浸透した Wh 要素 (*qué*) がその Spec 位置へ移動した Wh/Q もまた、Spec-Head Agreement によって Wh 要素の指標を付与され、演算子として機能することになる。つまり、Wh/Q もまた、VP 内部にある変項を束縛することになる。しかしながら、wh/Q による束縛は最小原理 (minimality) によって排除される (原初痕跡 (*ti*) を C 統御し、Wh/Q を C 統御しない潜在的な束縛要素 CI が介在する)。主語要素が Spec(v) に生成される (2b) は、この最小原理によって排除されることはない。¹⁾

- (2) a. *(Me pregunto) qué: Juan compró *ti* ayer. (Zubizarreta 2001: (36a))
 b. (Me pregunto) qué: compró Juan *ti* ayer.
 c. (Me pregunto) [qué platos]: Juan compró *ti* ayer. 'I wonder what-which dishes Juan bought yesterday.'



(3) の用例は、D(discourse)-Linked Wh 要素、あるいは付加語 Wh 要素の一部 (例えば *por qué*) が関与する派生における主語倒置の適用が随意的であることを示す。

- (3)a. (?)¿[Qué platos] Juan ha preparado para la comida? (Arnaiz 1992: (11b))
 'Which dishes has Juan prepared for the dinner?' [D(discourse)-Linked Wh-element]
 b. ¿[En qué medida] la constitución ha contribuido a eso? (Torrego 1984: (15a))
 'To what extent has the Constitution contributed to that?'
 c. ¿Por qué Juan quiere salir antes que los demás? (Torrego 1984: (15bb))
 'Why does Juan want to leave before the others?'

D-Linked Wh 要素が移動する (3a) では、Spec(D) にある素性 [+wh] の DP への上昇浸透が随意的であるため、Wh/Q が義務的に演算子として機能する必要はない。これにより、最小原理の違反が回避されることになる (2e)。 (3a) においては、特殊なイントネーション (具体的にはイントネーションの休止 (hiatus)) が観察される (Zubizarreta 2001: p.195)。付加語 (*por qué*) が生起する (3c) は、(2f) の派生構造によって説明される。この付加語は、TP よりも下位の位置に加えて、Spec(Wh/Q) に生成されると考えられる。Cl_j が付加語 (*por qué*) の生成位置を C 統御しないため、最小原理の違反が起こることはない。つまり、(3a) と (3c) は適格と予測されることになる ((3b) の適格性が当該付加語 Wh 要素 (*en qué medida* 'to what extent') の D-Linking 性に関連することを示す用例に関しては後述する)。

Zubizarreta (2001: fn.12) は、(1b) の C₁P 内部で確認された主語倒置の適用に関する随意性を変項として機能する痕跡を特定することによって説明する。具体的には、C₂P 内の原初痕跡でなく、matrix CP 内にある Wh/Q によって局所的に束縛された痕跡、つまり Spec(C₂) にある痕跡が変項として機能すると考える。これにより、(1b) の C₁P 内における主語倒置の義務的適用と C₂P 内における当該規則の随意的適用が説明される。同様に、Root CP 内における定動詞の右方に生起する (4) と (5) のすべてが適格と予測されることになる。しかしながら、B グループ (5c) と (5e-f) は不適格と判断される (A グループの用例は問題を引き起こすことはない)。

(4) A グループ (Goodall; Uribe-Etxebarria)

- a.¿[Qué puesto]_i: (*Josefina) tiene (Josefina) t_i en la empresa? (Goodall 1993: (2a); (2a'))
 'Which position does Josefina have in the company?'
- b.¿[A quién]_i: crees [C₁P t_i] que Juan le dio el premio t_i? (Goodall 2001: (14))
 'Who do you think that Juan gave the prize to?'
- c.¿[Qué puesto]_i: dijo Manolo [C₁P t_i] que Iris cree [C₂P t_i que Josefina ocupa t_i en la empresa]?
 'Which position did Manolo say that Iris believes that Josefina has in the company?' (Goodall 1993: (24))
- d.¿Qué_i dice Juan [C₁P t_i] que María ha dicho [C₂P t_i que Ana ha comprado t_i]?
 'What does Juan say that María said that Ana bought?' (Uribe-Etxebarria 1992: (26))

(5) B グループ (Torrego 1984: (37);(19b);(19c);(36a);(36b);(36c))

- a.¿[Qué libro]_i: (*María) dice (María) [C₁P t_i] que Ana le ha regalado t_i?
 'Which book does María say that Ana has bought her?'
- b.¿Qué_i pensaba Juan [C₁P t_i] que le había dicho Pedro [C₂P t_i] que había publicado la revista t_i]?
 c.*¿Qué_i pensaba Juan [C₁P t_i] que Pedro le había dicho [C₂P t_i] que la revista había publicado t_i]?
 'What did Juan think that Pedro had told him that the journal had published?'
- d.¿[Con quién]_i: (*tú) creías (tú) [C₁P t_i] que quería Juan [C₂P t_i] que María hablara t_i]?
 e.*¿[Con quién]_i: creías tú [C₁P t_i] que Juan quería [C₂P t_i] que María hablara t_i]?
 f.*¿[Con quién]_i: creías tú [C₁P t_i] que Juan quería [C₂P t_i] que hablara María t_i]?
 'Who did you think that Juan hoped that María speak with?'

上の (4) と (5) は、主語倒置を要求する Wh 要素が長距離移動する用例である。主語倒置を要求しない Wh 要素が長距離移動する派生に対しては、どのような予測がなされるであろうか。(4a) と (5a) の用例と同様に、Wh/Q が生起する Root CP 内部での主語倒置は義務的に適用される ((6a), (7a))。Spec(Ci) にある痕跡が変項として機能することになるこのタイプの派生においても、問題が起こる。つまり、A グループの用例である (6c) と (6e) が適格と予測される。しかしながら、この A グループの (6c) と (6e) は不適格と判断される (B グループの用例は問題を引き起こすことはない)。

(6) A グループ (Uribe-Etxebarria 1992; Uriagereka 1988)

- a.*¿[Por qué]_i (*Juan) dice (Juan) [C₁P t_i que ha dicho María [C₂P t_i que ha comprado (Ana) el coche t_i]]?
- b.¿[Por qué]_i dice Juan [C₁P t_i que ha dicho María [C₂P t_i que (Ana) ha comprado Ana el coche t_i]]? (Uribe-Etxebarria 1992: (27a))
- c.*¿[Por qué]_i dice Juan [C₁P t_i que María ha dicho [C₂P t_i que Ana ha comprado el coche t_i]]? ‘Why does Juan say that María said that Ana bought the car?’ (Uribe-Etxebarria 1992: (27b))
- d.¿[Por qué razón]_i piensas [C₁P t_i que dijo (Ron) [C₂P t_i que Don se fue t_i]]? (Uriagereka 1988: p.210)
- e.*¿[Por qué razón]_i piensas [C₁P t_i que Ron dijo [C₂P t_i que Don se fue t_i]]? (Uriagereka 1988: p.210) ‘For which reason do you think that Ron said that Don left?’

(7) B グループ (Torrego 1984; Olarrea 1996)

- a.*¿[Por qué]_i (*Pedro) cree (Pedro) [C₁P t_i que Juan no vino a la fiesta t_i]? (Olarrea 1996: p.228) ‘Why does Pedro believe that Juan didn’t come to the party?’
- b.¿[Por qué]_i dice Juan [C₁P t_i que ha dicho María [C₂P t_i que ha comprado Ana el coche t_i]]? (Torrego 1984: p.110)
- c.¿[Por qué]_i dice Juan [C₁P t_i que María ha dicho [C₂P t_i que Ana ha comprado el coche t_i]]? ‘Why does Juan say that María said that Ana bought the car?’ (judged by Uribe-Etxebarria (1992: p.472))

このように、Zubizarreta (2001) が提唱する変項の同定法が種々の問題を引き起こすものであることは明らかであろう。

2. 変項 (variable) の同定プロセス

上で観察した Zubizarreta (2001) が引き起こす問題は、変項 (variable) の同定プロセスが話者グループごとに異なると考えることによって打開される。最初に、主語倒置を要求する Wh 要素が長距離移動する (4) と (5) について考える。(4a) と (5a) が示すように、A グループと B グループの双方において、Wh/Q が生起する CP 内における倒置は義務的に適用される。(4) の A グループでは、Wh/Q によって局所的に束縛される痕跡が変項として機能する (変項として機能する痕跡は囲い文字で表記されている)。B グループの用例である (5b) と (5d) の適格性は、最も深く埋め込まれた C₂P 内での倒置が文法性判断に関与しないことを示す。中間の C₁P 内での倒置の適用、あるいは Spec(v)

において *pro* で実現される主語要素の生起が適格性につながる。C1P 内で倒置が適用される (5b) と (5d) は適格と判断される。C1P 内で倒置が適用されない (5c) と (5e-f) は不適格と判断される。(5) における相違は、B グループにおいて原初痕跡を局所的に束縛する要素が変項として機能する考えることによって説明される。つまり、B グループでは、(5a) の Spec(C1) の位置、そして (5b-f) の Spec(C2) にある痕跡が変項として機能する。上で観察したことは、以下のようにまとめられる。

(8) 主語倒置の引き金となる Wh 要素の長距離移動において、

a. A グループでは、Wh/Q によって局所的に束縛される Spec(C) にある痕跡が変項として機能する。

b. Bグループでは、原初痕跡を局所的に束縛する Spec(C) にある痕跡が変項として機能する。

主語倒置の適用が随意的である Wh 要素が長距離移動する用例である (6) と (7) においても、異なる話者グループの存在が確認される。A グループの用例である (6) では、中間の C1P 内における倒置の適用が適格性につながる。より厳密には、Wh/Q が生起する Root CP だけでなく、C1P 内でも倒置、あるいは Spec(v) において *pro* で実現される主語要素が適格性につながる (定動詞の直接左方に生起する頭在的主語要素が不適格性につながる)。最も深く埋め込まれた C2P 内における倒置は文法性判断に関与しない。B グループの用例である (7) では、倒置が要求されるのは、Wh/Q が生起する Root CP のみである。(6) と (7) の相違は 以下の (9) によって説明可能となる。興味深いことに、これは、(8) における変項同定プロセスが逆転した形になっている。つまり、(6) の A グループにおいては、原初痕跡を局所的に束縛する Spec(C2)) にある痕跡が変項として機能する。(7) の B グループにおいては、Wh/Q によって局所的に束縛される Spec(C1) にある痕跡が変項に指定される。

(9) 主語倒置の引き金とならない Wh 要素の長距離移動において、

a. A グループでは、原初痕跡を局所的に束縛する Spec(C) にある痕跡が変項として機能する。

b. Bグループでは、Wh/Q によって局所的に束縛される Spec(C) にある痕跡が変項として機能する。

本稿の仮説群が妥当するならば、(6) における付加語 Wh 要素 (*por qué (razón)*) の生成位置として Spec(C2) を指定することはできない (註 (1) を参照)。これは、当該付加語が Spec(C2) に生成されると考えると、(6c) と (6d) が適格と予測されることになるためである (当該派生において、Spec(C1) にある痕跡が変項として機能する)。つまり、長距離移動する付加語 Wh 要素 (*por qué (razón)*) は、C2P 内において TP よりも下位の位置 (例えば vP に付加した位置)に生成されることになる。²⁾

Wh/Q が生起する Root CP において主語倒置が適用されない (10a) の適格性は、非常に興味深い。(3b) と (3c) の用例が示すように、短距離移動する付加語 Wh 要素 (*en qué medida*) は、短距離移動する付加語 Wh 要素 (*por qué*) と同様に、主語倒置を要求しない。A グループの (6a) と B グループの (7a) の用例が示すように、長距離移動する付加語 Wh 要素 (*por qué*) は、Wh/Q が生起する Root CP における主語倒置を要求する。しかしながら、適格と判断される (10a) の Root CP では、この主

語倒置が適用されていない。

- (10) a.¿[En qué medida]; Juan había pensado [C₁P t_i que Pedro le había asegurado [C₂P t_i que la revista se arriesgaría a publicar eso t_i]]? (Torrego 1984: (23))
'To what extent had Juan thought that Pedro assured him that the journal would risk publishing that?'

- b.¿[Por qué]; dice Juan [C₁P t_i que María ha dicho [C₂P t_i que Ana ha comprado el coche t_i]]?
'Why does Juan say that María said that Ana bought the car?' (= (7c)) (Uribe-Etxebarria 1992: (27b))

つまり、(10a)における付加語 Wh 要素 (*en qué medida*) は、付加語 (*por qué*) とは異なる様式によって移動していると考えられる必要がある。(10a)における付加語 (*en qué medida*) の挙動は、当該付加語要素が D-Linked Wh 要素として機能していると考えられることによって説明されるであろう。既に述べたように、D-Linked Wh 要素 (*qué platos*) が生起する (3a) では、特殊なイントネーションが観察される (Zubizarreta 2001: p.195)。Uribe-Etxebarria (1992) が属する B グループでは、(10b) のタイプは不適格と判断される。これは、C₁P 内における顕在的な主語要素が定動詞の左方に生起するためであった (Spec(C₂) にある痕跡が変項として機能する)。しかしながら、Uribe-Etxebarria (1992: fn.56) が指摘するように、問い返し疑問文 (echo-question) に類似するある特定のイントネーションを伴う場合の (10b) は適格と判断される。これは、この種の派生における付加語 Wh 要素 (*por qué*) が D-Linked Wh 要素として機能していることを示すと考えられる。³⁾

ルーマニア語の短距離 Wh 移動においては、疑問詞 Wh 要素 (*de ce* 'why', *cum de* 'how come') が生起する派生を除き、[主語 (目的語)+定動詞] の語順が排除される (これは、スペイン語の状況と並行するものである)。関係詞 Wh 要素の素性 [+wh] が DP (PP) まで上昇浸透する必要がないと考えることによって、主語要素が定動詞表現の直接左方に生起する (11c) の適格性が導出される (関係詞 Wh 要素が生起するスペイン語用例 (11d) でも、主語要素が定動詞表現の直接左方に生起する)。スペイン語とは異なり、ルーマニア語の D-Linked 疑問詞 Wh 要素の素性 [+wh] は、DP (PP) まで上昇浸透すると考えられる。これにより、D-Linked 疑問詞 Wh 要素 (*pe care* 'which one') が生起する (11a) における [主語+定動詞] の語順が不適格と予測されることになる。

- (11) a. Mă întreb [pe care]; (*Ion) o. va invita (Ion) t_i? (Moţapanyane 1998: (21a))
'I wonder which one John will invite.'

- b. (Ştiu) unde (*Ion) s-a dus (Ion) t_i(?) (Moţapanyane 1998: (20))
'I know where Ion went.' 'Where did Ion go?'

- c. Ne-am întâlnit cu băiatul [pe care]; (Maria) nu voia să-l invite (Maria) t_i. (Moţapanyane 1998: (21b))
'We met the guy whom Maria did not want to invite.'

- d. El libro que el lector tiene t_i en sus manos es una introducción a las ideas del Programa Minimalista.
'The book that the reader has in his hands is an introduction to the ideas of Minimalist Program.'

疑問詞 Wh 要素が長距離移動する (12) のルーマニア語用例は、当該言語がスペイン語 (A, B グループ) と異なる変項同定プロセスに従うことを示す。ルーマニア語では、Non-Root CP 内における [主

語 (目的語, 付加語)+定動詞] の語順が排除される。これは, ルーマニア語において, 原初痕跡が変項と同定されると考えることによって説明可能となる。

(12) a. [Pe cine]_i spunea_i [C₁P t_i că (*Ion) invitate (Ion) t_i]? (Moțapanyane 1995: p.40, (35))

‘Whom did you say that Ion invited?’

b. Ce_i crede Ion [C₁P t_i că (*Victor) spusese (Victor) [C₂P t_i că (*revista) publicase (revista) t_i]?

‘What does Ion think that Victor said that the journal had published?’ (Alboiu 2000: p.196, (55))

c. Ce_i crede Ion [C₁P t_i că (*Victor) spusese (Victor) [C₂P t_i că (*săptămâna trecută) publicase revista t_i (săptămâna trecută)]]? (Alboiu 2000: p.197, (56))

‘What does Ion think that Victor said that the journal had published last week?’

既に述べたように, ルーマニア語の付加語 Wh 要素 (*de ce* ‘why’) が短距離移動する派生における倒置は随意的に適用される。対応するスペイン語の付加語 Wh 要素 (*por qué*) と同様に, 当該付加語は, TP よりも下位の位置に加えて, Spec(Wh/Q)(=Spec(C)) 位置に基底生成されると考えられる。これにより, (13a) と (13b) は適格と予測されることになる。付加語 Wh 要素 (*de ce*) が C₁P 内に生成される (13c) は, 不適格と予測される (当該用例は, 対応するスペイン語用例である (6a) と (7a) と同様に, 最小原理によって排除される)。

(13) a. [De ce]_i [pe Ina]_i n-o_j place nimeni (t_i)? (Alboiu 2000: p.169)

‘Why does no one like Ina?’

b. [De ce]_i Ioana crede [C₁P că l-am invitat] (t_i)? (Alboiu p.c.)

c.*[De ce]_i Ioana crede [C₁P că l-am invitat t_i]? (Alboiu p.c.)

‘Why does Ioana think that we invited him?’

d.*[De ce]_i crezi [C₁P că pe Ion l-a invitat Victor t_i]? (Alboiu p.c.)

‘Why do you think that Victor invited Ion?’

(13d) は, 本稿の仮説群に対して問題を引き起こす。付加語 Wh 要素 (*de ce*) が Spec(C₁) に生成されると考えた場合, (13d) は適格と予測されることになる。これは, この Spec(C₁) が変項と同定されるためである。しかしながら, (13d) は不適格と判断される。この問題は, 対応するスペイン語の付加語 Wh 要素 (*por qué*) が生起する (6c) と (6e) の非文性を説明する論法をルーマニア語に対して適用することにより打開される。具体的には, 語彙的に実現された C (*que, că*) は, その Spec 位置における付加語 Wh 要素 (*por qué, de ce*) の基底生成を阻止すると考えてみよう。つまり, C₁P 内の TP よりも下位の位置に当該付加語 Wh 要素 (*de ce*) が生成され, この生成位置が変項と同定される。結果として, (13d) の派生は, 最小原理によって排除されることになる。

3. 結び

Zubizarreta (2001) と本稿の仮説群は, Wh 要素が長距離移動する (14) と (15) のすべてを適格と予測する。これは, Spec(C₁) にある痕跡が変項と指定されるためである。しかしながら, (15b) の用例からも判明するように, 目的語 DP が定動詞に前置される用例を不適格と判断する話者グループが

存在する。

(14) α グループ (Ordóñez (1997); Ordóñez and Treviño (1999))

a.¿Qué te dijo Martina [C1P que [el abogado] no le había dado t a tiempo]?
'What did Martina say that the lawyer had not given her on time?' (Ordóñez and Treviño 1999: (43a))

b.¿[A quién] te dijo Martina [C1P que [el citatorio] ya se lo habían dado t]?
'Who did Martina say that they had given (her) the subpoena? (Ordóñez and Treviño 1999: (44a))

(15) β グループ (Goodall (2001); Masullo (1992))

a.¿[A quién] crees [CP1 que [Juan] le dio el premio t]? (Goodall 2001: (14))
'Who do you think that Juan gave the prize to?'

b.*¿[A quién] crees [CP1 que [el premio] se lo dieron t]? (Goodall 2001: (13))
'Who do you think that the prize they gave to?'

Masullo (1992: pp.121-122) は、主語 DP と心理動詞の経験者 DP (experiencer DP) が Spec(I) の位置を占める点で共通する挙動を示すと指摘する。例えば、主語 DP と心理動詞の経験者 DP の双方が埋め込み節における定動詞の直接左方に生起可能である ((16), (17a-b))。それに対して、Masullo (1992) の言う左方転移 (left dislocation) の適用を受けた要素が埋め込み節中の定動詞の直接左方に生起する派生は極めて周縁的と解釈される ((17c-d))。本稿では、主語要素と経験者要素の類似性を両要素の生成位置が共に Spec(v) であることに還元する (Franco and Huidobro 2003)。つまり、(15b) は、Spec(v) 位置に生成される要素以外の要素が埋め込み節中で定動詞の直接左方に生起する派生をまったく周縁的と判断する話者グループの用例と考えられる。

(16) El libro que el lector tiene en sus manos es una introducción a las ideas del Programa Minimalista.

'The book that the reader has in his hands is an introduction to the ideas of the Minimalist Program.'

(17) (Masullo 1992, p.121, (11a); (10a); (10b); (11b))

a. Este es el tipo de música coral que [a Adriana] le gusta más.
'This is the kind of choral music that Adriana likes best.' (←psychological verb)

b. Es una pena que [a Marcos] no le interesa la música coral.
'It is a shame that Mark is not interested in choral music.' (←psychological verb)

c.??Es una pena que [a Marcos] el comité no le otorgará una beca.
'It is a shame that to Mark the committee will not award a scholarship.'

d.?? Este es el tipo de música coral que [a los estudiantes] el profesor siempre recomienda.
'This is the kind of choral music that to the students the professor always recommends.'

非対格動詞 (例えば *ocurrir* 'happen') と共起する与格表現 ($a+DP$) もまた、Spec(v) 位置に生成されると考えてみよう。その場合、(15b) の V の *sister* に生成される直接目的語 DP (*el premio*) を Spec(v) 位置に生成される与格表現で置き換えた派生は、適格と予測されることになる (α グループと β グループの双方において)。この予測は、以下の (18) によって例証される。以下の (18a-b) は共に適格と予測されることになる (α グループと β グループの双方において)。

(18) (Masullo 1992, p.160, (133); (134))

a.¿[Qué operas] negó María que [a su esposo] le gustaran? (←psychological verb)
'What operas did María say deny that her husband liked?'

b.¿Cuándo dijo María que [a Juan] se le ocurrieron esas ideas raras?
'When did María say that those strange ideas occurred to Juan?'

註

*) 本稿は、日本ロマンス語学会第 45 回大会 (長崎県立大学 2007 年 5 月 27 日) における口頭発表の一部を拡張したものである。本稿の匿名レフリーから論文構成上の不備と思われる箇所、さらに誤植等の指摘をいただいた。ここに、謝意を表する次第です。

1) この Wh/Q の投射は、通例 C の投射に対応する。しかし、Suñer (1992) が Indirect Question と呼ぶ間接疑問文の用例 (i) では 2 つの C の投射が想定され、その最右端の C が Wh/Q に対応する (Suñer (1992) が Semi-Questions と命名する間接疑問文のタイプでは単一の C の投射が想定され、この C が Wh/Q に対応する)

(i) Juan preguntó [CP [C' (que) [CP [a quién] [C' C [TP habían invitado]]]]]?
'Juan wondered whom they had invited'

2) Jiménez (1997: p.191) が属する話者グループでは、Spec(C) 位置における基底生成が重い VP (heavy VP) の存在を要求する。VP が重くない派生では、付加語 Wh 要素 (*por qué (razón)*) が Spec(C) 位置に生成されることはない。

(i) a.¿Por qué (Pedro) vino (Pedro) a casa de los padres de María? (Jiménez 1997: p.191. (7a), (7b))
'Why did Pedro come to house of María's parents?'

b.¿Por qué (*Pedro) vino (Pedro) (Jiménez 1997: p.191. (8a), (8b))
'Why did Pedro come?'

3) これが妥当する場合、D-linked Wh 要素として機能する付加語 Wh 要素 (*por qué*) が長距離移動する派生の Root CP における [顕在的主語 + 定動詞] の語順が許容されることになる。

参考文献

- Alboiu, Gabriela (2000) *The Features of Movement in Romanian*, Ph.D. dissertation, University of Manitoba.
- Arnaiz, Alfredo (1992) "On Word Order in Wh-Questions in Spanish," *MIT Working Papers in Linguistics* 16, 1-10.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Franco, Jon and Susana Huidobro (2003) "Psych Verbs in Spanish Leísta Dialects," *Linguistic Theory and Language Development in Hispanic Languages*, ed. by Silvina Montrul and Francisco Ordóñez, 138-157,

- Cascadilla Press, Somerville.
- Goodall, Grant (1993) "Spec of IP and Spec of CP in Spanish Wh-Questions," *Linguistic Perspectives on the Romance Languages*, ed. by William J. Ashby, Marianne Mithun, Giorgio Perissinotto, and Eduardo Raposo, 199-209, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Goodall, Grant (2001) "On Preverbal Subjects in Spanish," *Current Issues in Romance Languages*, ed. by Teresa Satterfield, Christina Tortora, and Diana Cresti, 95-109, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Jiménez, María Luisa (1997) *Semantic and Pragmatic Conditions on Word Order in Spanish*, Ph.D. dissertation, Goergetown University.
- Martín, Juan (2003) "Against a Uniform Wh-Landing Site in Spanish," *Theory, Practice, and Acquisition: Papers from the 6th Hispanic Linguistic Symposium and the 5th Conference on the Acquisition of Spanish and Portuguese*, ed. by Paula Kempchinsky and Carlos-Eduardo Piñeros, Cascadilla, Somerville, MA.
- Masullo, Pascual José (1992) *Incorporation and Case Theory in Spanish: A Crosslinguistic Perspectives*, Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Moțapanyane, Virginia (1995) *Theoretical Implications of Complementation in Romanian*, Uni Press, Padova.
- Moțapanyane, Virginia (1998) "Focus, Checking Theory and Fronting Strategies in Romanian," *Studia Linguistica* 52 (3), 227-243.
- Olarrea, Antxon (1996) *Pre and Postverbal Subject Positions in Spanish: A Minimalist Account*, Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Ordóñez, Francisco (1997) *Word Order and Clause Structure in Spanish and other Romance Languages*, Ph.D. dissertation, The City University of New York.
- Ordóñez, Francisco and Esthela Treviño (1999) "Left Dislocated Subject and the pro-drop Parameter: A Case Study of Spanish," *Lingua* 107, 39-68.
- Suñer, Margarita (1992) "Indirect Questions and the Structure of CP: Some Consequences," *Current Studies in Spanish Linguistics*, ed. by Héctor Campos and Fernando Martínez-Gil, 283-312, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Torrego, Esther (1984) "On Inversion in Spanish and Some of its Effects," *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.
- Uriagereka, Juan (1988) *On Government*, Ph.D. dissertation, The University of Connecticut.
- Uribe-Etxebarria, Myriam (1992) "On the Structural Positions of the Subject in Spanish," *Syntactic Theory and Basque Syntax*, ed. by J. A. Lakarra and J. Ortiz de Urbina, 447-491, ASJU, Denostia.
- Zubizarreta, María Luisa (2001) "The Constraint on Preverbal Subjects in Romance Interrogatives," *Subject Inversion in Romance and the Theory of Universal Grammar*, ed. by Aafke Hulk and Jean-Yves Pollock, 183-204, Oxford University Press, Oxford/New York.